様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１２８９８

研究課題名（和文）日本語教師の調査ネットワークの構築と日系ディアスポラの言語生活調査

研究課題名（英文）An investigation of the linguistic lives of Japanese diasporas and the creation of an international research network for Japanese language teachers

研究代表者
三宅　和子（MIYAKE, Kazuko）

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：６０２５９０８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は現代社会の中で、日本、日本人、日本語の概念が個人とどのように関わり、アイデンティティの形成を支えるのかを、日本語教育と社会言語学の視点から調査・考察したものである。高度経済成長期以降に欧州に渡り長期滞在・永住する日本語話者を対象とし、高齢の国際結婚女性vs.子育て世代の国際結婚女性、永住日本人の親世代vs.2世・3世の子ども世代の、日本語の保持・継承、アイデンティティに関する質的研究、在英日本人会への質問紙法の量的研究を行った。さらに本領域に関心をもつ教育者・研究者らと国際学会で毎年パネルを組んだほか、最終年には欧州各地でワークショップや講演を行い調査・研究ネットワーク形成に努めた。

研究成果の概要（英文）：This research has investigated the ways in which concepts surrounding Japan, Japaneseness and the use of the Japanese language influence individuals living outside Japan and help form their identities. The subjects of the research are those who left Japan after the period of rapid economic growth in the '60s - '70s and have lived in the UK ever since. Qualitative and quantitative methods have been employed to investigate their efforts to maintain and pass down the Japanese language, Japanese customs and their sense of identity. Comparisons are made between elderly Japanese women married to British citizens and Japanese mothers who are currently raising their children outside of Japan. Comparisons are also made between the 1st generations and 2nd and 3rd generations.
This project has succeeded in cultivating a research network for Japanese language teachers by organizing panels in annual international conferences and giving workshops and lectures in the final year.

研究分野：人文学

キーワード：日系ディアスポラ　アイデンティティ　移動　ことば　日本語の継承　言語意識　日本語教師　ネットワーク

１．研究開始当初の背景

21 世紀の現在、人と情報がかつてない勢いで世界を移動している。筆者は日系ディアスポラに関してライフヒストリーを中心に研究してきた*1。海外の日本語使用者の研究としては、従来、以下の（1）（2）があるが、本研究は（3）高度成長期以降の個人の海外移住者の研究で、新視点の研究として位置づけられる。近年のトランスナショナルな人の動きを見据えた研究、さらに日本語話者の移動とその継承を考える研究はこれまでほとんど行われてきておらず、研究の意義は大きい。

(1)日系人の研究：ハワイや南米の移民言語研究の積み重ねがある*2。

(2)「残留日本語」研究：アジア、サハリン、太平洋地域などの調査が注目されている*3。

これまで研究対象に日本語教師は含まれていなかったが海外の日本語教師数は、2012 年現在 63,805 人(1979 年は 4,097 人)にのぼり*4、増加の一途をたどっている。日系ディアスポラ研究は、海外の日本語教師にとっては自身に関連する身近な関心事であり、教師自身がネットワークを作って調査に関与する意義は大きい。本研究は日系ディアスポラの研究および日本語教師のネットワークづくりという二つの側面をもつが、その成果は、日本語教育学の深化のみならず、ウェルフェア言語学の見地からも学術的な発見と貢献が期待される。

*1 三宅和子(2011-2013)「日系ディアスポラのコミュニティ、言語使用規範、アイデンティティ」科研費補助研究など

*2 中東靖恵（2011）．パラグアイ日系社会におけるアクセントの継承と変容　社会言語科学. 13-2. 72-87. など。

*3 真田信治(2006-2009)「東アジア残留日本語と日本語諸方言の相関に関する研究」科研費基盤研究(B)、朝日祥之(2005-2007)「サハリンに残存する日本語の地位に関する研究」科研費若手研究(B)

*4 国際交流基金(2012)「2012 年度日本語教育機関調査　結果概要抜粋」https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey_2012/2012_s_excerpt_j.pdf

２．研究の目的

本研究は、越境する人と物が交差・融合しグローバル化する現代社会の中で、日本人、日本、日本語の概念が個人とどのように関わり、アイデンティティの形成を支えるのかを、日本語教育と社会言語学の視点から調査・考察するものである。本研究には 2 つの目的がある。(1)高度経済成長期以降に欧州に渡り長期滞在・永住する日本語話者を日系ディアスポラと名づけ、日本語をめぐる言語実践について、様々な角度から調査を行うこと、(2) この調査研究活動と結果の公開(学会発表や講演)を通じて、現地の日本語教師とのネットワークを形成し、今後の共同調査・研究への足がかりを堅固なものとすることである。

３．研究の方法

日本語教育に携わる人々は国内においても様々な言語や文化に囲まれて生きるが、海外においてはその地の言語や文化を受け止め、日本語の保持や継承に努力しつつ自己のアイデンティティと向き合いながら生きている。本研究はこのような日本語教師を日系ディアスポラの一員として位置づけ、自らをも含む実態に関心を向け、調査・研究者としての役割を担う調査ネットワークを組織する。

具体的には、日系ディアスポラに関する質的研究と量的研究を融合させた形で、対象に総合的に迫る一方で、日本語教師への、主に啓蒙活動に力を入れた。

(1)質的研究の中心をなすインタビュー調

査では、毎年夏と冬に対象者に会って調査し、60～70 年代に国際結婚して英国に永住する高齢の日本語話者、90 年代以降に国際結婚して子育て中に日本語話者の比較、日本人家族としてイギリスに住む日本語話者に重点的に会い、半構造化インタビューを行い、その政治経済的な時代的な背景も考慮に入れて考察を行った。

(2)研究の後半では、(1)の結果を踏まえ、国際結婚家庭の子弟で 30～40 歳代に達している社会人にインタビューを行い、1 世としての親世代と 2 世としての子ども世代の日本、自己のアイデンティティなどの意識の差や日本語能力に関して考察を深めた。

(3)(4)で述べるアンケート調査の結果を基に、英国籍を取得している高齢日本語話者にインタビューを行い、永住権保持者がほとんどを占める対象者の中で英国籍を取得する意味やアイデンティティの持ち方の違いなどを考察した。

(4) 量的研究の中心をなしたのは、2015 年度に行った英国日本人会会員に対して行った調査である。2015 年現在 315 名の会員中 138 名の回答を得た。年齢、配偶者の有無や就業状況、渡英理由や在留理由などを聞くとともに、アイデンティティの根拠や国籍について質問し、長期に在外居住する日本語話者の実態を把握することを狙った。

(5)(1)～(4)の調査研究の結果を積極的に公表することで、日本語教師（特に外国在留の）に向けて発信し、ネットワークづくりを行った。

４．研究成果

本研究の結果は一般の調査研究と性質が異なり、成果をまとめて結論として提示することは難しい。したがって、どのような調査を行ったかを辿りつつ成果としての概要を以下にまとめる。

(1) インタビュー調査

国際結婚して外国に永住する高齢者に対する調査を皮切りに、子育て世代調査、そして日本人夫婦の在留者と調査を進めた（①②③）。これらの調査により、日本国籍をもち海外に長期間住む理由や問題点を探り、国際結婚と日本人間の結婚の場合とはどのように異なるか、アイデンティティはどのように変化するかの指標をつかんだ。これらの調査結果の中から、いずれのケースも日本語・日本文化の保持・継承について大きな関心が持たれていることが明らかになった。

長期在留日本人のほとんどは永住権を取得して在住するが、一部英国籍を取得しているものがいる。英国籍取得の理由とアイデンティティの関係を調査（④）したが、永住権のみの日本人との異なりは特に大きくはなかった。外交官の伴侶であるなどの忠誠義務による英国籍取得以外は、利便性や日本国籍以外にその国の国籍をもっておくことを「保険」と考えているとの理由があげられた。

国際結婚をした日本語話者の子どもたちが大人（30～40 歳代）になった場合、どのようなアイデンティティや日本語に対する意識をもつか、親の育て方や意識も同時に調査したのが⑤である。子どもたちは親の意識や育て方に影響を受けながらも、生まれ育った場所・国を最も大きな拠り所にしながら、自らのアイデンティティを模索しつつ、独自の道を進んでいる様子が観察された。

①2013 年国際結婚高齢者 10 名インタビュー
②2013 年国際結婚子育世代 10 名インタビュー
③2014 年日本人家庭 10 名インタビュー
④2016 年英国籍取得者を中心にインタビュー
⑤2017 年国際結婚親対子ども世代インタビュー

(2) アンケート調査

英国日本人会の会員に対して質問紙法によ

る調査を行い（2015 年 10 月～11 月）、315 名中 138 名の回答を得た。年齢、配偶者の有無や就業状況、渡英理由や在留理由、家庭での言語使用、アイデンティティの根拠や国籍などについて質問し、自分の意思で長期に日本を離れて外国に在留する日本語話者の実態を把握した。60～70 歳代、既婚者、すでに退職しているメンバーが多く、高齢者集団であること、渡英の理由は留学、仕事、結婚のほか様々な理由であったことが分かった。一方長期在留となった理由は結婚が最も多く、次に仕事、その他も多かった。ほとんどの人が日本人という気持ちを強く保持しつつ長期在留・永住しており、国際結婚している人の割合も８～９割に達している。しかし終の棲家として英国を選ぶか、日本に帰国することも視野に入れるかなど、決められない人が 3 割近くおり、その立場と意識の不安定さが示唆された。

（3）国際会議発表

研究期間を通じて、調査結果と考察を即時国際会議で積極的に発表を行い、課題の重要性と興味の喚起に努めた。

・2015 年 6 月 The Sociolinguistics of Globalization Conference, Hong Kong
・2015 年 8 月 第 28 回日本語教育連絡会議・ザグレブ
・2015 年 8 月 第 19 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム・ボルドー
・2016 年 9 月 日本語教育国際研究大会・ヌサドゥア
・2017 年 8 月～9 月 第 15 回ヨーロッパ日本学会（ＥＡＪＳ）国際大会・リスボン

（4）国内研究会・学会発表

研究期間を通じて、調査結果と考察を即時国内でも研究会や学会で発表を行い、課題の重要性と興味の喚起に努めた。

・2015 年 7 月 第 14 回ひと・ことばフォーラム・東京
・2016 年 1 月 第 1 回「移動」とことば研究会・東京
・2016 年 9 月社会言語科学会第 38 回大会・京都
・2016 年 12 月第 20 回ひと・ことばフォーラム・東京

（5）ネットワーク活動

本領域に関心をもつ教育者・研究者らと国際学会で毎年パネルを組んだほか、最終年には欧州各地でワークショップや講演を行い（ケルン、パリ、ロンドン）、調査・研究ネットワーク形成を行った。

（6）研究会発足・研究書出版

この現代的問題に関心を向ける教育者と研究者との連携は極めて重要であるとの認識のもと、上記の活動以外に、科研採択 1 年目(2015 年)の冬に「移動とことば研究会」を立ち上げた。通算 3 回の研究会を開催し、そこでの発表から選出した研究をベースに、論文集『移動とことば』(2018 年 8 月刊行予定)を上梓する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 8 件）

①三宅　和子、移動と定住のアイデンティティ－英国日本人会へのアンケート調査結果の分析－、東洋通信、第 53 巻第 4 号、査読無、2016 年、pp.101-116

②三宅　和子、在英国際結婚家庭における「日本語学習」をめぐる親の「願い」－「日本語」に関する語りを批判的に分析する－、ヨーロッパ日本語教育、Vol.20、査読無、2016 年、pp.120-126

③三宅　和子、社会言語学の新潮流－‘Superdiversity’が意味するもの－、早稲田日本語教育学、第 20 号、査読有、2016 年、pp. 99-104

④三宅　和子、国際結婚女性の複数言語・複数文化状況の変化とアイデンティティ、第

18 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集、査読無、2015 年、pp.59-65
⑤三宅　和子、イギリスにおける日本人の国際結婚女性の言語生活－その社会的背景と子育て世代の日本語の保持・継承、東洋通信、第 52 巻第 2 号　査読無、2015 年、pp.82－94

〔学会発表〕（計 11 件）
①三宅　和子、成長した「移動する子ども」の日本語習得―教えられなかった日本語が意味をもつ日、第 15 回ヨーロッパ日本学会国際大会、2017 年
②三宅　和子、Superdiversity 時代の継承語教育を考える－子どもに日本語を教えなかった母親の語りを通して－、日本語教育国際研究大会、2016 年
③三宅　和子、日系ディアスポラにおける「移動」の意味とアイデンティティ、社会言語科学会第 38 回大会、2016 年
④三宅　和子、在英国際結婚家庭における「日本語学習」をめぐる親と子の葛藤と選択、第 19 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム、2015 年
⑤三宅　和子、What made Japanese Female Expatriates Retain and Recreate their Sense of Japanese Identity? 、 The Sociolinguistics of Globalization Conference、2015

〔図書〕(計 4 件)
①三宅　和子　他、くろしお出版、移動とことば、2018、印刷中
②三宅　和子、他、ひつじ書房、コミュニケーションの方言学、2018、319-337

６．研究組織
(1)研究代表者
三宅　和子（MIYAKE, Kazuko）
東洋大学・文学部・教授
研究者番号：６０２５９０８３